

## 会員の声



### 情報科学・工学，私はこう考える

## メディアが伝えたいものは何か、 私はこう考える

平山 智史†

縁あって「情報メディア研究会」のお手伝いを始めてすでに1年である。その間いろいろな分野の方々からお話を伺う機会を得た。大学の研究者やコンピュータの製造メーカそしてソフト会社などの専門の方々はもちろん、加えて放送技術、編集、報道、家電、ゲームさらに博物館あるいは化粧品会社の方々など実に多彩でユニークな顔ぶれである。この研究会の特色は専任研究者よりも産業界の現場からの発表者が多いことであろうか。

したがって発表者の多くは「私のような者が、このようなアカデミックな席で話しをするのは実に恐れ多いことで、間違ったことを言うかもしれないのですが(ムニャムニャ)…」とまったく恐縮しながら話を切り出される。ところがそこで語られる生きた経験談は実に興味深く、また示唆に富んでいて教えられることが多い。失敗談やノウハウなどは実務最前線の担当者から直接伺わなくては身近に意識する機会すらなかった。文献にはのらない話だ。このような話題は特に専任研究者の盲点となっていたところだと思う。研究会では質疑の大半はこの点に集中する。そして多くの啓示を受ける。真に得難い機会である。

従来の情報科学・工学では情報の処理法あるいは操作法のメカニズムについての議論が行われてきた。しかしまだ肝心の情報の生態そのものについてはあまり深く調査されていない。むしろ心理学や社会学などの研究領域だった。「情報メディア研究会」ではこの領域が学際的であることを強く認識し、異業種、異分野のメンバの方々への参加をお願いしてきた。この方針は多くの共感をいただき登録会員の数もすぐに500人を超えることができた。おかげで産業界と研究者、異分野の研究者同士などの活発な交流が始まり、互いの盲点が埋められるよい機会となっている。

さて、こうして研究会に参加させていただいているうちに、門前の小僧の私にもメディアとは何なのだろうかという疑問がわくようになった。

かつてメディアとはまさしく媒体のことで、放送を伝えるラジオ・テレビであり、音楽を収める

レコードであり、データを収めるフロッピーであり、映像を保存するビデオテープなどのことでありと認識されていた。つまり単に伝達媒体であり入れ物であった。

しかしそのビデオに収められている映像作品自体も監督や俳優のメッセージを収納し伝達するメディアだと考えられる。つまり作者のメッセージを入れた作品という入れ物である。そういえば人間の衣装だって化粧だって、人は状況にあわせて変化させている。これも自己表現の伝達媒体である。だからこれもメディアだ。大口を開けて笑ったり涙いっぱい泣いたりする顔の表情もメディアととらえることができる。

なんのことはないこうして考えていくと、身の回りの物すべてがメディアに見えてくる。

私はここ数年小型のペンコンピュータの企画、開発に取り組んできた。これを商品に仕上げるのはなかなかの苦労だった。企画構想、試作あたりまではまだ創造の楽しさに溢れている。しかし仕様が固まり設計、安全規格、部品手配、工場での製造、納期などの問題が起こりだすと困難はどんどん膨らむ。なんとか最後まで続けられたのは、お客さんからの「へえ、おもしろいものがあるんだな、便利そうだな」の一言を聞きたい一心があったからであろうか。身の回りを見渡してみると、机、蛍光灯、ノート、鉛筆、本などいろいろなものが目に入る。全てだれかが苦労して、頑張って作り上げたものだ。ここにも人間のメッセージが込められている。「これは結構苦労して作ったんだよ、大切に使ってね」という声が聞こえてくるようだ。どんな仕事でも動機は類似している。

利己的な遺伝子という言葉が頭をよぎった。メディアは自己主張のための道具だったのであろうか。

そんなことを考えながらふと窓の外を見ると、遠くかすむ山並みを朱に染めて太陽がゆっくりと沈んでいくところだった。美しい。

大自然の存在もわれわれに何かを伝えようとのメッセージを込めたメディアなのだろうか。メディアの本質について考え込む今日このごろなのである。

(平成4年1月21日受付)

† ソニー(株)コンピュータ & マルチメディア開発本部



平山 智史 (正会員)  
1957年生。1980年北海道大学工学部電気工学科卒業。1982年同大学院修士課程情報工学専攻修了。同年ソニー(株)入社。現在同社コンピ

## 会員の声



## 情報科学・工学，私はこう考える

### メディアとしての学会誌，私はこう考える

土井 美和子†

本学会誌は、1960年の発刊当時、隔月発行で年間240ページとこぶりの学会誌であったが、情報処理分野の情報収集のメディアとして重要な役割を担っていたと思われる。たとえば第3巻第1号には、「情報処理に関する文献の所在調査」と題して、ACMなどの雑誌や本がどこに行けば見られるかが説明されている。また、SimonやFeigenbaumらの最新の重要文献も数多く紹介されている。当時これらの情報を提供する唯一のメディアとしての本学会誌のもつ意義は大きかったであろう。

それから30余年を経た現在、研究者をめぐる状況は大きく変化している。電子ニュースや電子メールの発達により、質・量ともに十分な最新の情報を計算機の前に座ったままで収集できる。したがって、自分の専門分野に関する最新の情報の収集は、電子ニュースなどを使って行っているのが現状であり、この点に関するかぎり、学会誌のもつ当初の意義は薄れてきたのではないだろうか。

代わって紙の印刷物に求められるのは、即時性・新規性よりは普遍性のある情報の提供であると思う。自分の専門分野以外の情報については学会誌の解説記事を読む場合が多い。ことに情報処理の分野も最近では細分化の傾向が進んでおり、自分の専門分野以外の領域については、時代遅れの知識しか持ち合わせていないということにもなりかねない。これを補うための良質の啓蒙的知識を提供するメディアとしての機能の充実を、学会誌に期待したい。

学会誌に望みたい第二の点はマルチメディア化への対応である。現在、情報処理の対象は音声・

ユーザ & マルチメディア開発本部に勤務。コンピュータ言語の設計、ホームコンピュータのマーケティング、ペンベースコンピュータのユーザインタフェースの研究開発に従事。

静止画像・動画像・CG・アニメーション、それらの複合へと広がっている。このような文字以外のメディアを対象とした研究成果を発表するために、研究会・全国大会などではカラー写真やVTRの使用が不可欠となってきている。学会誌においても、これらのマルチメディアの研究成果を読者に効果的に伝えるために、紙の印刷に拘らない情報伝達の形態を考慮すべき時期にきているのではないだろうか。たとえば、カラー特集号のほか、VTR、あるいはCD-ROM特集号などを他の学会に先駆けてご検討いただければありがたい。

最後に、学会誌への要望から離れるが、学会事務局に対しても電子メールを取り入れていただくよう希望したい。研究会の連絡委員の間では、電子メールを利用して連絡し合い、時間の節約をはかっている。しかし、残念ながら、現在学会の事務局に対しては電話やFAXという旧来の方法に頼らざるをえない。これは、他の学会についても言えることである。計算機に最も関係の深い本学会の事務局が電子メールを使い出せば、他の学会の電子化にも貢献することになるに違いない。

(平成4年1月23日受付)



土井美和子 (正会員)

1954年生。1977年東京大学工学部電子工学科卒業。1979年同大学院工研究科電気工学専攻修士課程修了。同年(株)東芝入社。以来、同

社総合研究所情報システム研究所にて、文書処理、コンピュータ・グラフィックスを中心としたユーザ・インタフェースの研究に従事。人工知能学会、計測自動制御学会、認知科学会各会員。

†(株)東芝総合研究所